

子どものからだづくりの試み

—園内での子どものけがをめぐる親の要求を受け止めて—

金澤 妙子*

Training Children's Core Strength at the Nursery as a Way of Reducing Injury Risk

— Inspired by a complaint from a parent to the nursery

Taeko KANAZAWA

1. はじめに

日本子ども資料年鑑（2017）の「女性の働き方別、保育所・幼稚園のサービスで充実させて欲しいもの」が示すところによれば、「子どもの安全管理・事故防止」への要求度は20%未満と低い〔資料1〕¹⁾。これは安全が確保されていると見ることもできるが、子どもが園で安全に過ごせることは保育の大前提と捉えているのかもしれない。増田隆男（2004）²⁾は、様々な事故事例と事故後の対応の問題について示す中で、学校は、「教育活動」が目的で生活関係が成り立っているので監督義務の範囲が狭くなるが、「保育」というのは、学校などとは違って、そこで遊びも就寝もするという生活関係そのものが行われている点が重要視され、学校の場合よりも監督義務の範囲が広がることはやむを得ないことかもしれない、と述べている。乳幼児を対象とする保育の場では、生命を脅かしたり、大きな後遺症を残す事故への備えや避けるための努力、対応はさることながら、日常的に起こるひっかきや噛みつきなど、小さな傷やけがが起り、親の対応も含め難しい。松野（2015）³⁾は、子どもの遊びには元来、危険が内在しているとする。だからこそ事故防止の問題は、リスクをどこまで予測・許容し、マネジメントするかが重要な課題であるという認識を示している。

齋藤（2004）⁴⁾は、乳幼児の死亡は年を追って改善されているが、その中で「不慮の事故」に原因する死亡はほとんど改善されていない。「不慮の事故」は、国民の死因順位では第五位だが、年齢階級別にみた場合には、1歳から24歳の間では第一位を占めている。「また、幼稚園・保育所における事故・災害の現状を日本スポーツ振興センターの統計からみると、年間10万5000件以上の発生件数であり、乳幼児の事故は年々増加の傾向にあり」、看過できない大きな問題となっている。「安全教育は、けがひとつしな

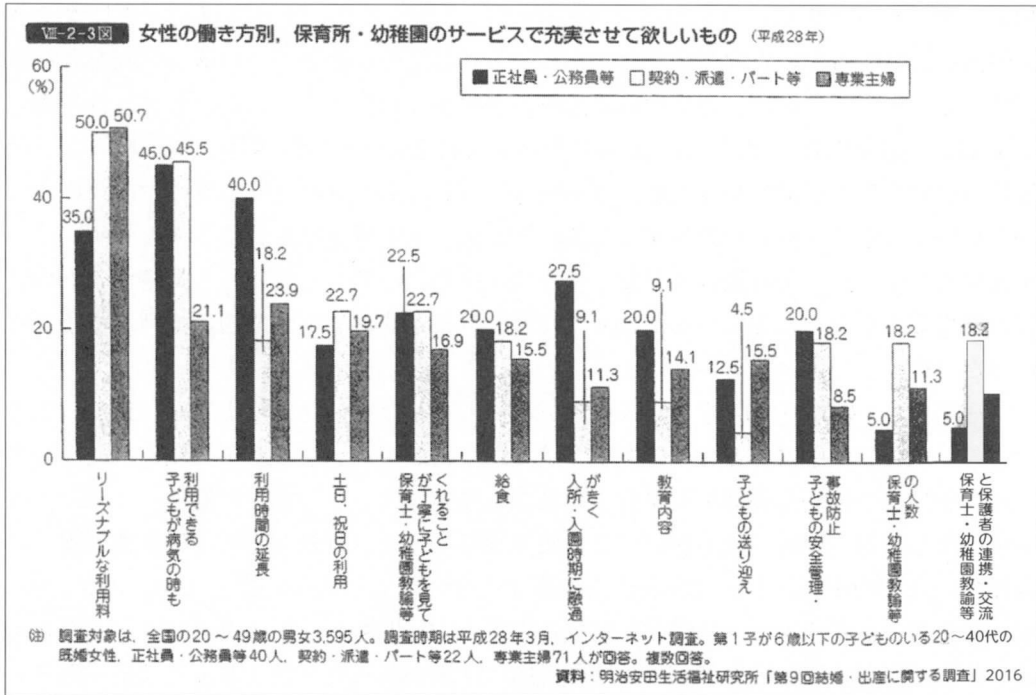
い子どもを育てること」ではない。「生傷が絶えなくとも、子どもには積極的に遊びや運動を展開させ、多くの体験をさせることによって心豊かでたくましい体に鍛えらるとともに、自分で安全に行動できる能力を身につけさせることが大切」で、「安全に行動できる能力の高い子どもは、その年齢での発達に必要な条件、すなわち、遊びが十分満たされている」。「安全指導の基本としては、日常生活の中で子どもに多く体験をさせ、実践的な指導をすることが重要」とする。

一方、スポーツ庁が公表した令和元年度の「全国体力・運動能力、運動習慣等調査」によると、各調査種目の合計点の平均値である「体力合計点」が、小・中学生ともに低下した。男子の低下ぶりが目立ち、特に小学校男子は平成20年度の調査開始以降、最低の数値となった⁵⁾。文部科学省は、平成19年度から21年度に実施した「体力向上の基礎を培うための幼児期における実践活動の在り方に関する調査研究」で、体を動かす機会の減少傾向がうかがえる結果であったことから、幼児にとって体を動かして遊ぶ機会が減少することは、その後の児童期、青年期への運動やスポーツに親しむ資質や能力の育成の障害に止まらず、意欲や気力の減弱、対人関係などコミュニケーションをうまく構築できないなど、子どもの心の発達にも重大な影響を及ぼすことにもなりかねないと、主体的に体を動かす遊びを中心とした身体活動を、幼児の生活全体の中に確保していくことは大きな課題であるとしていた⁶⁾。文部科学省策定「幼児期運動指針ガイドブック」⁷⁾では、現代の幼児期における子どもたちの身体活動・運動（からだを動かすことや遊び）について、主な問題点が4つあげられている〔・活発にからだを動かす遊びが減っている／・からだの操作が未熟な幼児が増えている／・自発的な運動の機会が減っている／・からだを動かす機会が少なくなっている〕。内、幼児の身体活動・運動と、それに伴う体力の現状について、「自発的な運動の機会が減っている」（第二章1.）の解説は興味深い。すなわち、「体操、水泳、サッカーなどの習い事に取り組むことは、活発にからだを動かす機会となります。しかし、遊びではなく特定の運動ばかり行うとしたら、多様な動きを身に付けていくことには適していませんし、自発的な遊びにもつながらない可能性があります。幼児期に様々な運動（遊び）をする大切さは、単に活動する機会を与えればよいのではなく、幼児が興味をもって遊びに自発的に関われるかどうか重要です。また、発育期の幼児にとって適切ではない頻度や強度の運動を行うことは、使い過ぎによるケガを起こす引き金となります」⁸⁾。

ある園では、続けて起きた2名の4歳児の顔面の切り傷への園の対応（病院を受診・通院）に対する親の要求を受け止め再発防止を考えていく中で、子ども自身が鈍くなっている、移動は車ばかりの生活で子どものからだは鍛えられない、砂場でしゃがんで遊ぶことができず、ペタっとおしりをついて穴掘りなどをしている、など子どもの体力のなさに行き当たった。「安全な環境や保育士の配慮は不可欠だが、それだけではけがを防げない。日頃から子どもが自分の身を守る力の低下にも目を向けていく必要を感じており、保育士と子どもの両面から考えていきたかった」（A園長談）と、平成26年から

5年計画でけがをなくするための取り組みを始めた【後述3,4参照】。公立園のため園長以下職員は異動し、その時の職員で問題意識を共有しにくくなっているが、この件に関して年間計画を作成し、手が出て自分を守れる子どもが育つ運動遊びや環境構成などを考えて取り組みを継続した。本稿では、この取り組みに見られる子どもの姿と取り組みの意味について考えていくことで、上述のような体力低下への現実を示していきたい。

資料1



出典：恩賜財団母子愛育会 愛育研究所編集、日本子ども資料年鑑（2017）KTC 中央出版、296

2. 研究方法

私はこの地域で保育実践を検討する有志の研究会に年約3回約11年間参加してき、けが発生当時からのA園長とは既知の間柄であった。退職に際し、後任のB園長に私の関心を橋渡ししていただき、参与観察を続けた。この間園内では、子どものからだづくりの取り組みを継続し、記録、随時まとめが行われている。起きてしまった園内のけがをめぐる親の要求を受け止めた園側のあり方を追いたいと思い、この取り組みの実践記録の提供をお願いし、実現した。保育実践の参与観察と園訪問時の保育者や園長への聞き取りとその記録、取り組みの実践記録から考える。観察は平成26年度8回、平成27年度5回、平成28・29年度各3回、平成30年度1回。

〈園について〉

地方の大都市圏のベッドタウンにある公立園。少子化の地域ではなく、定員 270 名がほぼ埋まる。職員は様々な時間帯のパート保育士を含めると約 60 名（H30）。

3. きっかけになったけがのあらまし

4 歳女兒が園庭から室内に入る際、テラスに沿って敷いてあった人工芝マットで滑り転倒。額をテラスの角に打ち付けて 2cm ほど切り出血した。すぐ看護師（乳児クラスに配置）に見てもらい止血。園では、あらかじめ各児のかかりつけの病・医院を各科ごとに伝えてもらってある。園長は親に連絡、家庭から指定されている〇整形外科でいいかを確認し連れて行った。3 針（完治した状態で約 2cm の傷痕：筆者確認）縫った。園側はけがの発生を厳粛に受け止め、万一同様に倒れてもコンクリート製の段の角にぶつからないようなスペースを確保する位置に人工芝マット敷き直し、凹凸をなくす、子ども達にはテラスに上がる際は慌てないように伝えた。当初、母親は、人工芝マットの位置を見てこんなふうにしてくれたのですねと、特に不快感や不満を抱いている様子はない（後日、いろいろあった）。

二週間後、4 歳男児が戸外ですべり台から滑ってきた際、たまたま誰かが乗りっぱなしにしていた二輪車に目と目の間をぶつけて切り出血した。前年度年長組担任だった男児の担任は、午後から保幼小連絡会に参加する予定があり、午後 1 時過ぎ、B 男が病院から治療して帰った時には不在だった。園長は迎えに来た母親（元私立保育園勤務）に担任のいない理由を話し、自分が会を欠席するよう言わなかったことも付け加えたが、翌日（土曜日）と翌々日（日曜日）に気遣う電話も訪問もしなかったことなども合わせて、園の保育の在り方やけが後の園の対応に不満があったと思うと園長は振り返る。

男児がけがをした翌週の初め、父親（労災関係の仕事）が来園。「子どもが乗り捨てた二輪車が片づけられていないのは、労災上問題」と指摘し、今後二度とこのようなことが起こらないように通り一遍の謝罪の言葉ではなく具体的な改善策（文書 / のちに不要となった）を求めた。園内の話し合いで、A 園長は男児の保護者とのやり取りや思いを話し、求められていることへの共通理解を図り、けがをした原因や保育の現状を出し合った。その中でけがを怖がってなんでもかんでも片づけてしまうのは保育としてはベストではない。子ども自身が鈍くなっている、今の保護者は移動も車ばかりの生活を子どもにさせていてからだは鍛えられない。それでも、園で事故が起きればみんな園のせいかな？という本音も出る中、各自が自分にも起こり得ることと真剣に受け止め、一緒に考え、安全への意識を共有でき、再発防止へ向けて、保育環境の見直し、保育者の関わりについて考えた。「安全な環境や保育士の配慮は不可欠だが、それだけではけがを防げない。日頃から子どもが自分の身を守る力の低下にも目を向けていく必要を感じており、保育士と子どもの両面から考えていきたかった」（A 園長談）。

このけがへの親の要求を受け止めた形でこの園では、H26年から5年計画でけがをなくするための取り組みを始め、手が出て自分を守る子どもが育つ運動遊びや環境構成などを考えて、約3年が経過している。次に、この取り組みについてみておきたい。

4. 取り組みの経緯

(1) H26年度～取り組みのスタートと方針

けがの件数は、平成24年度（A園長着任）は5件、平成25年度は13件と2.5倍に増えた（すべて受診・治療を要した）。

H25年度の13件のけがの発生状況をまとめ、けがの理由を探る中で、1. 転ぶケースが増えたのか、手がつかないことからのけがが増えたのか 2. どんな子が転ぶのか 3. 脚力不足 4. バランス感覚が不十分 5. 総運動力の低下や特定の経験不足といった乳幼児の生活が変化しているのか、に行き当たった。対策を考えるにあたって、保護者で運動遊びの専門家（短大勤務、市の実技研修担当）に助言を仰ぎ、取組の3つの軸を決めた。

1. 思い切り体を動かす。たくさん、速く走る。

➡力をつけていくためには、最大限の力を出すことが大切で、最低でも、持っている力の70 - 80%の力を使うことが必要。自分の力を出し切って速く走るためには、強い力が必要となるので、とても有効である。

2. 手をつく姿勢を多く経験する。

➡「自分の体を手で支えられる」という感覚が育っていないと手は出ない。

3. 体幹の教化（バランスをとる）

➡体勢を崩している状態から立て直す、支えることのできる体づくり（腹筋・背筋）

〈条件として：全年齢が〉

※毎日継続して、楽しく、全員が、保育士と一緒に

（園提供 平成26年度まとめより）

5月から〈怪我を防ぐことができる子どもを育てる一遊び・環境の工夫を通して〉として全園で開始した。

(2) けがの発生数

3件（H26）、7件（H27）だった。体を動かすことで小さなけがは増えたが、平成28年度は大きなけがは減っていると思った時期もあったが、また13件（H28）になり、けがが減るとは言えないと認識を軌道修正した。平成29年度は統計を取っていないとのこと（B園長談）。

また、けがの状況把握に際しては、きっかけになったけがが起こる以前より、単に月日、氏名、男女（年齢）、時間、場所、発生状況だけでなく当該児の、動くこと、走ること、バランス、得意な遊び、不得意な遊び、その他の項目で、1人1人のからだの動き・

運動能力を丁寧に把握して書き込んでいた [資料 2]。保育者の意識の高さと置かれている状況の厳しさが推察できる。

資料 2

平成 25 年度 ケガの状況

月日	氏名	男女	時間	場所	発生状況	動くこと	走ること	バランス	得意な遊び	不得意な遊び	その他
25.4	6	男 (中)	14:00	園庭	飛行機ジム露保部分から降りようとしたが、手を滑らせて落ちた。手をかき切ってしまう。	自発的に動き回るよりも保育士の誘いを待てる。友達の誘いに従うことはある。	走る力はあるが、待に好んで参加しない。	バランスは良い。一輪車など挑戦する意はある。	ドッジボール、一輪車	慎重でゆっくりとしようとする姿は少ない。	自分でやってみようと思いついた成り果てたこと、できたこと、長く遊び続けることができる。

(3) 通信の発行

「けがは全面的に子どもに非があると思っていると誤解されるのではないかと思い、両兄の保護者に直接は話さなかったが、理解してもらい家でも取り組んでほしい」(A 園長) と思い、取り組みの様子や親子でできる運動遊びを紹介した通信を出した。結果、9 割以上に内容が伝わっていて、関心をもっただけでなく、好感を持ち、積極的に取り入れる保護者や、子どもが家でもやってみせてくれるなど、家庭での親子のかかわり・ふれ合いを広げていくところが見られている。

5. 保育所保育指針等に見るけがを防げるからだ作りと当該園の取り組み

まず、本稿の目的であるけがを防げる健康なからだ作りについて、現行の、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領、幼稚園教育要領でなんとやっているのかを押さえておきたい。下記、筆者作成の表に見るように、どの年齢でも、無理なく、進んでからだを動かすことを楽しむことが大切にされている。



園庭の様子

表1 保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領、幼稚園教育要領にみる健康なからだ作り（本稿に、特に関連すると思われる箇所を抜粋）

	乳 児	一歳以上三歳未満児	三歳以上児
	<p>身体的発達に関する視点「健やかに伸び伸びと育つ」 健康な心と体を育て、自ら健康で安全な生活をつくり出す力の基盤を養う。</p>	<p>心身の健康に関する領域「健康」 健康な心と体を育て、自ら健康で安全な生活をつくり出す力を養う。</p>	
ねらい	<ul style="list-style-type: none"> 伸び伸びと体を動かし、はう、歩くなどの運動をしようとする。 	<ul style="list-style-type: none"> 明るく伸び伸びと生活し、自分から体を動かすことを楽しむ。 自分の体を十分に動かし、様々な動きをしようとする。 	<ul style="list-style-type: none"> 明るく伸び伸びと行動し、充実感を味わう。 自分の体を十分に動かし、進んで運動しようとする。
内容	<ul style="list-style-type: none"> 一人一人の発育に応じて、はう、立つ、歩くなど、十分に体を動かす。 	<ul style="list-style-type: none"> 走る、跳ぶ、登る、押す、引っ張るなど全身を使う遊びを楽しむ。 	<ul style="list-style-type: none"> いろいろな遊びの中で十分に体を動かす。 進んで戸外で遊ぶ。 様々な活動に親しみ、楽しんで取り組む。 健康な生活のリズムを身に付ける。 自分の健康に関心を持ち、病気予防などに必要な活動を進んで行う。
内容の取扱い	<p>心と体の健康は、相互に密接な関連があるものであることを踏まえ、温かい触れ合いの中で、心と体の発達を促すこと。特に、寝返り、お座り、はいはい、つかまり立ち、伝い歩きなど、発育に応じて、遊びの中で体を動かす機会を十分に確保し、自ら体を動かそうとする意欲が育つようにすること。</p>	<p>心と体の健康は、相互に密接な関連があるものであることを踏まえ、子ども〔園児〕の気持ちに配慮した温かい触れ合いの中で、心と体の発達を促すこと。特に、一人一人の発育に応じて、体を動かす機会を十分に確保し、自ら体を動かそうとする意欲が育つようにすること。</p>	<p>心と体の健康は、相互に密接な関連があるものであることを踏まえ、子ども〔園児／幼児〕が保育士等〔保育教諭等／教師〕や他の子ども〔園児／幼児〕との温かい触れ合いの中で自己の存在感や充実感を味わうことなどを基盤として、しなやかな心と体の発達を促すこと。特に、十分に体を動かす気持ちよさを体験し、自ら体を動かそうとする意欲が育つようにすること。</p> <ul style="list-style-type: none"> 様々な遊びの中で、子ども〔園児／幼児〕が興味や関心、能力に応じて全身を使って活動することにより、体を動かす楽しさを味わい、自分の体を大切にしようとする気持ちが育つようにすること。その際、多様な動きを経験する中で、体の動きを調整するようにすること。 自然の中で伸び伸びと体を動かして遊ぶことにより、体の諸機能の発達が促されることに留意し、子ども〔園児／幼児〕の興味や関心が戸外にも向くようにすること。その際、子ども〔園児／幼児〕の動線に配慮した園庭や遊具の配置などを工夫すること。 安全に関する指導に当たっては、情緒の安定を図り、遊びを通して安全についての構えを身に付け、危険な場所や物などが分かり、安全についての理解を深めるようにすること。（後略）

乳児、一歳以上三歳未満児は、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領の記述から、三歳以上児は、同左に幼稚園教育要領の記述を加え、〔 〕内表記は、幼保連携型認定こども園／幼稚園の順とした。（作成・太字金澤）

また、当該園では、きっかけとなったのは4歳児であったが以下のように0歳から年長児までの全体的な育ちと考えられていた。つまり、からだづくりに取り組んではいても、単年齢で一朝一夕になるものではなく、経年による積み重ねの中でなされていくと捉えられていることが分かる。

資料3

怪我を防ぐ子どもを育てる取り組みについて（年長）

平成28年8月

☆8月までの取り組み

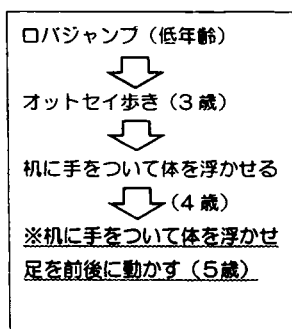
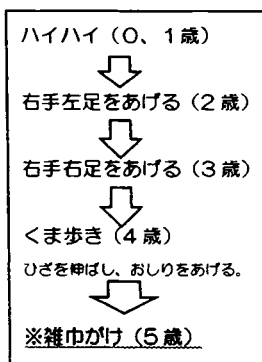
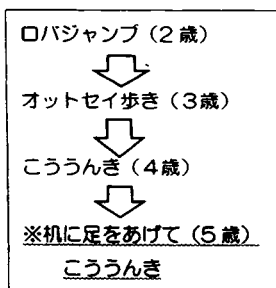
- ・机に手をつけて体を浮かせる→足を前後に動かす。（両足を揃える→両足を前後に動かす。）
- ・ケンケン、スキップ、ひざ立ちペンギン歩き、くも歩き、雑巾がけ。
- ◎スーパーマン滑り→机4（くま歩き）
- ・プール遊びの中で、バランスをとりながら全身を十分に動かす経験を重ねる。
（歩く、走る、鬼ごっこ、ワニ歩きなど）
- ◎ケンケン相撲。

☆子どもの様子

- ・机に手をつけて体を浮かせ、両足を前後に動かすはできる子が増えてきたので足を交互に動かすようにしていく。
- ・ケンケンでかかとをあげるとバランスを崩す子が多かったが、ケンケン相撲を楽しんできたことで少しずつバランスをとれるようになってきた。
- ・雑巾がけのできない子はくま歩きをしっかり取り組めるようにした。
- ◎スーパーマン滑りは喜んで取り組む姿があった。

☆縦のつながり

※年長の最終目標



☆9月の取り組み

※できない子は、一つ前に戻って取り組む。

- ・机に手をつけて体を浮かせる・足を前後に動かす。（両足を揃える→両足を交互に動かす。）
- ・ケンケン、スキップ、ひざ立ちペンギン歩き、くも歩き、雑巾がけ。
- ・こううんき（友達同士）
- ・組み立て（
、
、
、
）
- ・頑張りカード（一輪車、竹馬、跳び箱、すえん登り、鉄棒）

6.3 歳未満児の姿・取り組みの様子

(1) 0・1歳児の場合

保育士と両手をつないで、両足でジャンプする、ハイハイ、正座した保育士の膝の上に立つなど、こうした取り組みをしなくてもよくあるような保育士と子どもとの触れ合い遊びで、無理のない形で行われていることが分かる。

資料4

<0・1歳児 運動遊び> 「怪我を防ぐことができる子どもを育てる」

<目標>保育士と両手をつないで、両足でジャンプする。

6月現在 できる子の人数

こっこ組 (人 / 人)

びっぴ組 (人 / 人)

	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
こっこ組										
びっぴ組										

※手をつく※ → ハイハイする

わあお!の体操をする・・・毎日、行う。

保育士の足の下をくぐる・・・毎日、行う。

※バランスをとる※

正座した保育士の膝の上に立つ・・・毎日、行う。

<できる子の人数>

	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
こっこ組										
びっぴ組										

資料7 さまざまなアイデア

山登り（ダンボール滑り台）、グラグラボード、バランス靴、グラグラ風船ベッド



(2) 取り組みの実際について

- ① 私は、運動・からだづくりだけを取り出すことに懐疑的だった。自ら関心のある遊びの充実を中心とした保育を目指しているが、時間で保育の流れを区切る、戸外で好きな遊びをする際もクラスごとに時間を設ける、数クラス一斉に出ると場所を指定した遊び方になっている様子がある。その保育のあり方が変わると子どもの動きも自然に活動的になり、個々の遊びの充実にもつながっていくと考えるところがあった。しかし、現実問題として定員 270 名（H26）がほぼ埋まる園の規模は無視できない要因であり、保育者の（安全上の）現場感覚も重要に思えた。

参与観察や記録・写真から見る取り組みは、乳児では、〈散歩をする・ハイハイする〉（0・1 歳児）などごく当たり前のことが多かった。0・1 歳児で難しいのは〈正座した保育士の膝の上で立つ〉というものであった。〈ギッタンパッコン〉、〈こううん機〉など、かつてどの家庭でも親子でやっていたようなもの、保育者と子どものスキンシップも増えるものが多かった。

- ② 記録を読んでいると毎月同じに見える時がある。変わっている所を探しても数行でしかない。子どもの実態にあって無理がないからとも取れる。特に0・1 歳児の場合は、そうかもしれない。

ゆっくりでもできるようになることを意識しているので、記録にはできることを喜び合う姿やできる子は誰で誰ができないのか、どう変化していくかを見ている。できない子どもたちにどんな援助をしたらよいのか？という思いが書き込まれる。特に平成 27 年度は、環境作りの工夫を重点的に考えていたため、室内環境を図や写真を利用しながら記録が取られるようになっていった。「どんな環境設定をするとういのか？」と自問している。環境設定が大事とは言われていても、課題が明確になっているので疑問も直球で、工夫もある。

- ③ だだ、机の山登りのような、普段の生活の中では机に上っている子がいれば降りなさいと禁止するようなものに裸足で上（らせ）ることに保育者は抵抗がなかったのか。

食べ物をのせるものを遊びや活動の道具にして、しかも裸足で上ることの中で、運動遊び時間外に子どもがそのようにすることはなかったのかなど、気になる点は残った。

7. 3歳以上児の姿・取り組みの様子

幼児は乳児より課題の変化のテンポも早く多様である。次にこの点をみていく。

(1) 年間目標、その展開について

表2 年間目標／園から提出された資料から抜粋して筆者作成

年少年間目標：	クモ歩き（前後に動く）／4月～⇒クモ歩きのポーズ（10秒間キープ）／7月～
年中年間目標：	クモ歩き・机に手をつけて足を浮かせる（10秒間キープ）。
年長年間目標：	〔園から提出された資料には特に設定されていない〕

表2に示したように、年間目標はほぼ1つ。前年の反省をもとに少しプラスし無理がない形である。また目標へ向けて、子どもたちができること・できないことをチェックし、お尻をあげて動くことが苦手だとすると腹筋と腕の力が足りないのではと考え、どのような取り組みをしていくかを2つの軸〈たくさん走る 思い切りからだを動かす〉〈バランスをとる・手をつく姿勢を経験する〉から考えていく（年中／資料8参照）。

さらに、年長の年間目標については、資料9の最下部に「☆年間目標…昨年の反省を載せます」と手書きされており、忙しい日常の中で、追い付かない振り返り作業を見る思いがする。保育現場の現実であろう。

資料8

2. どのような取り組みをしていくか？

月	たくさん走る 思い切り体を動かす		・バランスをとる ・手をつく姿勢を経験する	
	体操			
4月	げんきつき体操	かけっこ、追いかけてっこ、鬼ごっこ	動物まねっこ(カエル・クマ・クモ)	
5月	オースジー			
6月				バランスキープする(クモポーズ・片足バランス)
7月		プールで走る、動物のまねをする(ヒヨコ・カエル・ペンギン・ワニ)		
8月				
9月		かけっこをする		
10月			片足ケンケンをする	クモ歩き(後ろに下がる)
11月				
12月		水鬼・鬼ごっこ・けいどろなど		
1月			机に手をつけて移動する	クモ歩き(前に進む)
2月			机に手をつけて浮かせる	
3月			机に手をつけて浮かせる(10秒キープ)	

資料9

☆8月の取り組み

- ・机に手をついて体を浮かせる・足を前後に動かす。(両足を揃える→両足を交互に動かす。)
 - ・ケンケン、スキップ、ひざ立ちペンギン歩き、くも歩き。雑巾がけ。
 - ・プールの中で、バランスをとりながら全身を十分に動かす経験を重ねる。
(歩く、走る、鬼ごっこなど)
 - ・スーパーマン滑り(逆さまになってしっかり手をつけていく)
- ◎ケンケン相撲楽しんでいく。

☆年間目標 … 昨年の反省をもとに載せませす。

(2) 実践の振り返りから

① 年少クラスの実践の振り返り例—7月の取り組みから抜粋

資料10

どうぶつ なりきりカード
なまえ

こうもく	1	★	2	★	3	★
くまあるき	てをつく	32人	おしりあげ	28人	あるく	10人
うまじゃんぶ	てをつく	50人	10かい	46人	20かい	34人
かえるじゃんぶ	5かい	36人	10かい	34人	15かい	24人
ぺんぎんあるき	あるく	32人	10ぽ	25人	20ぽ	12人
ふらみんご	5びょう	12人	10びょう	6人	ほんたい	0人
きりんあるき	あるく	32人	10ぽ	26人	20ぽ	14人
おっとせい	あしのほし	50人	10ぽ	4人	20ぽ	0人
ておしぐるま	あしのほし	47人	10ぽ	37人	20ぽ	3人



三歳児クラス くまあるき



三歳児クラス フラミンゴ

② 年中クラスの実践の振り返り例—11月の取り組みから抜粋

資料11

① 思い切りからだを動かす

ねこどんやどろけい、鬼ごっこ、ドッチボールなどの集団遊びや鉄棒、なわとび、竹馬など遊具や用具を使って体を動かすなど、様々なからだを動かす遊びを楽しむように園庭では設定したり、一緒に遊んできた。

② バランスをとる。

ケンケンパを行ってきて、片足ケンケンパは8月の時点では10mはほとんどの子がいくことができた。20mにするとどうかを確認した。

→ほとんどの子が片足ケンケンパで20m進むことができた。

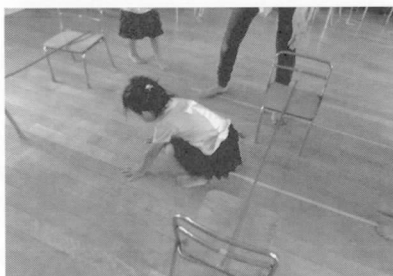
③ クモ歩きを後ろに下がることをやった。

クモ歩きを後ろに下がるのは、10mであればほとんどの子が8月の時点ではできるようになっていた。今回は20mと距離を伸ばし、行ってみた。

→後ろに進むことはほとんどの子ができた。しかし、距離を長くしたことで、子ども達から「疲れた…」と言う声が聞かれた。前に進むのとどちらが難しいか聞くと、どちらも簡単との回答だが、どちらが疲れるかと聞くと、後ろ向きに進む方が疲れるとのこと。

→12月の取り組み

- 今後寒さも厳しくなってくるため、引き続き体を動かし遊ぶ遊びをしていく。
- クモ歩きをやってきたが、20mにしたことで、疲れるという声が多く聞かれた。腕の力が弱いのではないかと感じたため、机を使って手を使い動くことをやっていき、腕の力をつけていくようにする。




これのみ五歳児、他三歳児

資料12 一人ひとりを見る視点

けがをしない体作り経過報告 7月

どのくらいできるのか把握するために個別の記録をとる。



※かかとを上げお尻をしっかりとあげているかを見る。 →

うみ組くん

ケガをしない体を作るチェック表 4歳児				
名前 くん				
項目	7月	9月	12月	3月
最終目標 おしりをしっかりとあげる	かかとを上げてお尻をしっかりとあげる ×			
前に進む	×			
後ろに進む	×			
手押し車	○			
前に進む	5歩			
片足立ち (バランス)	2秒			

資料13 年長クラスの実践の振り返り例—8月の取り組みから抜粋

〈年長7月子どもの様子〉

- ・机に手をつけて、体を浮かせる(10秒)動きは、ほとんどの子ができるようになった。
- ・ケンケンでかかとをあげるとバランスを崩す子が多かった。
- ・雑巾がけ→正しい姿勢できない子(○組7名、△組10名☆組…)
- ・雑巾がけ「もう1回やる〜!」と楽しく取り組んでいた。(後略)

〈年長8月の取り組み〉

- ・机に手をつけてからだを浮かせる・足を前後に動かす(両足を揃える→両足を交互に動かす)。
- ・ケンケン、スキップ、ひざ立ちペンギン歩き、クモ歩き。雑巾がけ。
- ・プールの中で、バランスをとりながら全身を十分に動かす経験を重ねる(歩く、走る、鬼ごっこなど)。

◎ケンケン相撲楽しんでいく。

資料11からは、「ほとんどの子が~できた」という記述(太字)に、設定した動きができるかを確実に押さえる視点を見ることができる。また、子ども達から出た「疲れた…」という言葉の中身を確かめながら、原因を探り、腕の力の弱さから来るのではないかと、腕の力をつけていくように次の取り組みを考えるなど、常に、子どもの実態に寄り添っていかうとしていると見ることができる。また、けがを防ぐことができるから

だづくりに取り組むなどと言うと、何かすごいことをするように思われるかもしれないが、思い切りからだを動かすことを意識したり、具体的には、「ねこどんやどろけい、鬼ごっこ、ドッチボールなどの集団遊びや鉄棒、なわとび、竹馬など遊具や用具を使って体を動かす」とあり、特別なことではないことも窺える。

資料13では、7月、「机に手をつけて、体を浮かせる（10秒）動きは、ほとんどの子ができるようになる」（太字）と、8月には「机に手をつけてからだを浮かせる・足を前後に動かす（両足を揃える→両足を交互に動かす）」。7月、「ケンケンでかかとをあげるとバランスを崩す子が多かった」とすると、ケンケンは継続し、バランス感覚を培う経験をさせるように考えられている。必ず当該月の子どもの姿の押さえがあって、それを少し重複しつつ次の月の構想がある。

③ 「※できない子は、1つ前に戻って取り組む」という毎月繰り返される記述が示すもの

この記述から、各々のステップを無理なく確実に踏み固めていこうとする意図を感じる。できるか否か見ている、できることに追い込むことにブレーキをかける作用ももったのではないかと考えられる。

8. 取り組みが生んだもの～保育者による研究の芽

公立園はどんなにその時の職員で問題意識を共有して取り組んでも、職員異動で継続が難しいこともある。園長以下職員は変わったが、その時の思いは去る者・残る者・加わった者で引き継がれてきた。「取り組み自体が、1～2年で結果が出るものではなく、また、子どもたち一人一人の身体能力の差などから、怪我の件数だけでは正確な変化を見ることができないため、評価につなげることが難しい」（園提供平成27年度まとめ）とあるように、今後も継続していけるかは不明である。

定員270名がほぼ埋まり、内200名近くが延長保育の利用登録児、勤務シフトは複雑で、保育者は様々な雇用形態を含めて50人を超える。いつみんなで話し合う時間が取れるのか、共通意識をどう共有するのかという忙しさである。そういう保育の日常の中で、平成27年度を振り返って「評価につなげることが難しいが、今年度の成果として感じられることとしては、保育者自身の保育力が上がったということ」と記している点に私は着目する。

一つには、このようなからだを動かす遊びを保育者が知らなかった、知っていてもやってこなかったこともあるだろう。しかし、それ以上に、課題をもって保育し、継続して見続けること、振り返ること、書き、まとめること、こうした一連の、保育を見続ける思考力を自分の中に実感しているということなのだと思う。

この問題が起きなければ、こんなに全園で継続して子どもの様子や自分のかかわりを

記述することはなかったのではないか。「年度末、課題としてあげていた通り、年度初めは、継続して進めるにあたっての意識統一の難しさに、まず立ち止まってしまった、昨年度の取り組みを整理して作成した年間計画をもとに、年齢会議で確認をしたり、幼児会議・低年齢会議・リーダー会議で具体的な取り組みや疑問点、困っている点などを伝えあったりする中で、この研究の目的や日々の積み重ねの大切さの共通理解を図れ、今年度も園全体の取り組みとして定着した」。ここにあるのは、記録すること、共有すること、話し合うことである。けがをめぐって親の要求を突き付けられた年に在職していた保育者はともかく、少しずつ人が変わると問題意識・課題の共有は難しくなる。そういう時にも、取り組みの目的や経過、見通しが年間計画としてあり、毎月の実践記録がある、しかも27年度からは環境の工夫を考えるという副題に合わせて図示・環境構成図・遊びの様子などイラストや写真入りで工夫され、新たにメンバーになった人や直接のクラス外の同僚にも分かりやすく、賛同を得られやすかったのではないか。

9. おわりに

私は運動・からだづくりだけを取り出すことに懐疑的だった。自ら関心のある遊びの充実を中心とした保育を目指しているが、時間で保育の流れを区切る、室内と戸外を自由に行き来して遊べない保育のあり方が変わると、子どもの動きも自然に活動的になり、個々の遊びも充実しつつ、からだも鍛えられると考えていた。何度伝えてもそう動くことはなかったが、取り組みの方向の3点（体を動かす、手をつく、バランス）は常に意識され、その後の観察では子ども達のからだを動かす活動・機会は以前より増えていると感じる。事故発生当時からの保育者の、からだを動かす遊びの提案も非常にうまく・広がりがある【事例参照】。けがが減るわけではなくても、意識し続けてきた結果だと思ふ。統計を取らなくなったことは、保育が日常に戻ったとも言える。日常に戻っても意識し続けるところにこの取り組みの定着があり、統計上の成果に変わる成果だと思ふ。

事例 平成29年12月7日

午後、園庭で自由に遊んでいる子どもたち。フラフープ、保育者とペアになった2人縄跳び、パイプの補助通路幅を利用し、一輪車で挑戦する。からだづくりのものかを保育者に尋ねると、そうだというものもあれば、違うのもあるようだが、こんなに運動遊びしていたかなーと思うほど、からだを動かしている。そのうちの、女兒たちの4人グループは「縄跳びって結構疲れるスポーツなのよね。ダイエットみたい」と言っていて、縄跳びをしていたが、そのうちフラフープになり、「いっせーのーで！」と合図に、「あーたしさくらんぼー」と歌に合わせて腰を回す。からだも幅があり、仲間内では一番へたなH子は、「お片付けになる」と言われても、「もうお片付けだよって言うまで、あきらめません！」と自由時間ぎりぎり一杯挑戦する姿勢だ。できなくても、堂々としていて意欲的である。

ドッジボールをやっているクラスの担任 U 先生、クラスに入ることになって、スキップ・ケンケン・ダッシュで入ろうと持ちかけると、子どもたちは喜び、ノリがいい。スキップ・ケンケン・ダッシュ！で部屋に入るのかと思いきや、(不意に) 折り返したりするので、「えーっ」とからだをカクッと落として、子どもたちもその予期せぬ外しを楽しんで、何度も繰り返す。もう入ろうという時になっても、繰り返しや違うパターンをせがまれて、保育者の方が、「じゃあ本当にこれが最後ね」などと、生活の一コマに戻すのに、苦心がいるほど楽しんでた。

記録だけを読んでいる時には、「ペンギン歩きでトイレに行く」とか、経過的な(何かと何かの隙間)生活の一コマまでも運動につなげることについては、私自身は首を傾げるところもあったが、戸外から中に入るという行為・場面もこんなものなら、楽しくからだを動かすことになっているのではないかと思って見た。新人の時から見ている U 先生も、子どもとのやりとりや活動の仕かけ方に磨きがかかってきたなーとも思った。

【引用文献】

- 1) 恩賜財団母子愛育会 愛育研究所編集 (2017) 日本子ども資料年鑑. KTC 中央出版. 296
- 2) 増田隆男 (2004) 保育所・幼稚園で事故が起きたとき—対応と安全管理. かもがわ出版. 33-36
- 3) 松野敬子 (2015) 子どもの遊び場のリスクマネジメント—遊具の事故低減と安全管理. ミネルヴァ書房
- 4) 齋藤歎能 (2004) 子どもの安全を考える 事故・災害の予防から危機管理まで. フレーベル館. 3-4, 86-87
- 5) <https://www.nippon.com/ja/japan-data/h00632/> (情報取得/2020/3/27)
- 6) 文部科学省 幼児期運動指針策定委員会 (2012) 幼児期運動指針 https://www.mext.go.jp/a_menu/sports/undousisin/1319771.htm (情報取得/2020/3/27)
- 7) 文部科学省 幼児期運動指針策定委員会 (2012) 「幼児期運動指針ガイドブック～毎日、楽しく体を動かすために～」
- 8) https://www.japan-sports.or.jp/Portals/0/data0/publish/pdf/youjiki_2.pdf (情報取得/2020/3/27). 14. 株式会社サンライフ企画

【参考文献】

- ・厚生労働省 編 (2018) 保育所保育指針解説. フレーベル館. 91-100, 123-134, 184-203
- ・内閣府・文部科学省・厚生労働省 (2017) 幼保連携型認定こども園教育・保育要領. フレーベル館.
- ・文部科学省 (2018) 幼稚園教育要領解説. フレーベル館. 145-166

【謝辞】

現場の大変貴重な資料をご提供していただきましたことに心よりお礼申しあげます。

【付記】

本稿は、日本乳幼児教育学会第27回大会、日本教育学会第77回大会での口頭発表に加筆・修正しまとめたものである。